

様式 1

研究報告書（平成 26 年度）

提出者 宮本和歌子

提出年月日 平成26年11月7日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 江戸川乱歩の短編「赤い部屋」の作品構造

英文 The Structure of EDOGAWA Ranpo's *Akai Heya*

**【研究のねらいと目的】**（600 字程度）

江戸川乱歩の短編作品「赤い部屋」は、谷崎潤一郎の短編作品「途上」に案を得て執筆されたといわれている。確かに、未必の故意を巧みに用い、絶対に法に触れない犯罪を犯すという着想は、「途上」に拠っていると考えられるが、日常生活に飽き足らず、世の常ならぬ刺激を求めるといった人物像や、室内の雰囲気によって、恐怖心の度合いが一変する様子など、谷崎潤一郎とは別の作家の作品に案を得たと考えられる要素も存在する。それらについて、検証を行う。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

**【成果の概要】**（800字程度）

江戸川乱歩の「赤い部屋」に登場する、猟奇クラブのメンバーというのは、日常生活に非常な退屈を感じ、並の刺激では飽き足らずより強い刺激を求め、異常な体験を日々追求していると説明されている。このような人物は、江戸川乱歩が愛読していた作家である宇野浩二も、「生命の皮」という童話の主人公として描いている。「生命の皮」の主人公は、退屈な日常が解消されるならば、自分の寿命が縮まることもいとわないとあるが、これは、江戸川乱歩が「赤い部屋」で描いた猟奇クラブの趣旨と同じものである。

宇野浩二「生命の皮」の主人公像を踏襲した猟奇クラブメンバーは、赤で装飾を統一された室内で、会合を開いている。赤い部屋の内部にいる人物が、宇野浩二の作品を踏まえているわけであるが、その人々を内包している、人々を幻感させ、正常な判断を不能にする部屋という着想もまた、他作家の作品からの案によるものと推測できる。この推測を、確認すべく、江戸川乱歩の旧蔵書リストを調査し、書籍の内容を調査した。

これらの内容は、論文として作成中である。

**【通信欄】**